

コロナで深まった日中地方間交流の絆

春節を迎えた2月11日夜、東京タワーが赤色にライトアップされました。春節を祝うライトアップは2年前から始まり、今回が3回目です。過去2回の点灯は、春節休暇で多くの観光客の来日を歓迎する内容でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大で一転し、事態の収束を祈り、展望台メインデッキの窓にLEDで「希望」の2文字が投影されました。



2021年旧正月大晦日に「チャイナレッド」と「希望」と、東京タワー史上初の2文字ともにスペシャル点灯

新型コロナウイルス感染が日本で初めて確認されてから、1年が経ちました。初の患者は、神奈川県に住む中国籍の30代男性で、武漢市を訪れていて帰国後1月16日に感染が確認され発表されました。同28日には邦人帰国のためのチャーター機第1便が武漢に派遣され、2月3日にはダイヤモンド・プリンセス号が横浜に入港し大規模なクラスターが発生しました。3月には東京五輪・パラリンピックが延期になり、4月には最初の緊急事態宣言が出されました。

当時の国内の感染確認は1日当たり数百人でしたが、夏の第2波では1日1000人を超え、11月からの第3波では感染拡大の勢いがさらに加速しました。今年2月になって減少傾向が見えてきていますが、国内の感染者は累計約42万人、死者は7000人を超えていて、1年たっても収束の気配は見えていません。そんな中ですが、ようやくワクチンの接種が始まるという明るい希望も出てきています。

誰が悪いのでもない、原因はコロナウイルスにあります。コロナウイルスであっても地球上の生命体であるとするならば、太古からそうであったように、これからも緊張感をもって対峙していくしかないという覚悟を決めています。

一方、今回のコロナ感染の拡大の中で、私たちは忘れかけていた「思いやりと寛容」を再確認する機会を得ました。

昨年1月27日でした。一般社団法人日中科学技術文化センターの巨東英理事長から「中国国内でマスクなどが不足しているから送ってほしい！」と電話が来ました。

テレビで状況は多少伝わってきていましたが、緊迫感が伝わる巨理事長の声は上ずっていません。早速近くの量販店で「これだけしかないです！」と言う店員の言葉に、あるだけのマスクを買い占めて東京の本部に送りました。早速来たお礼状には「湖北省十字会に送りました！」とありました。その後このことで、協会を通じて中国から大量の医療物資の逆支援を受けるきっかけになりました。

更に、私が常務理事を務める静岡県日中友好協会(天野一会長)は、中国で医療物資が不足しているから、できるだけ早く寄付金を募って物資を送ろうと募金を開始しました。

この取り組みを聞いた、静岡県内に住む留学生を含む中国人の皆さんは「我が国を支援する活動に協力したい！」と寄付を申し出てくれました。

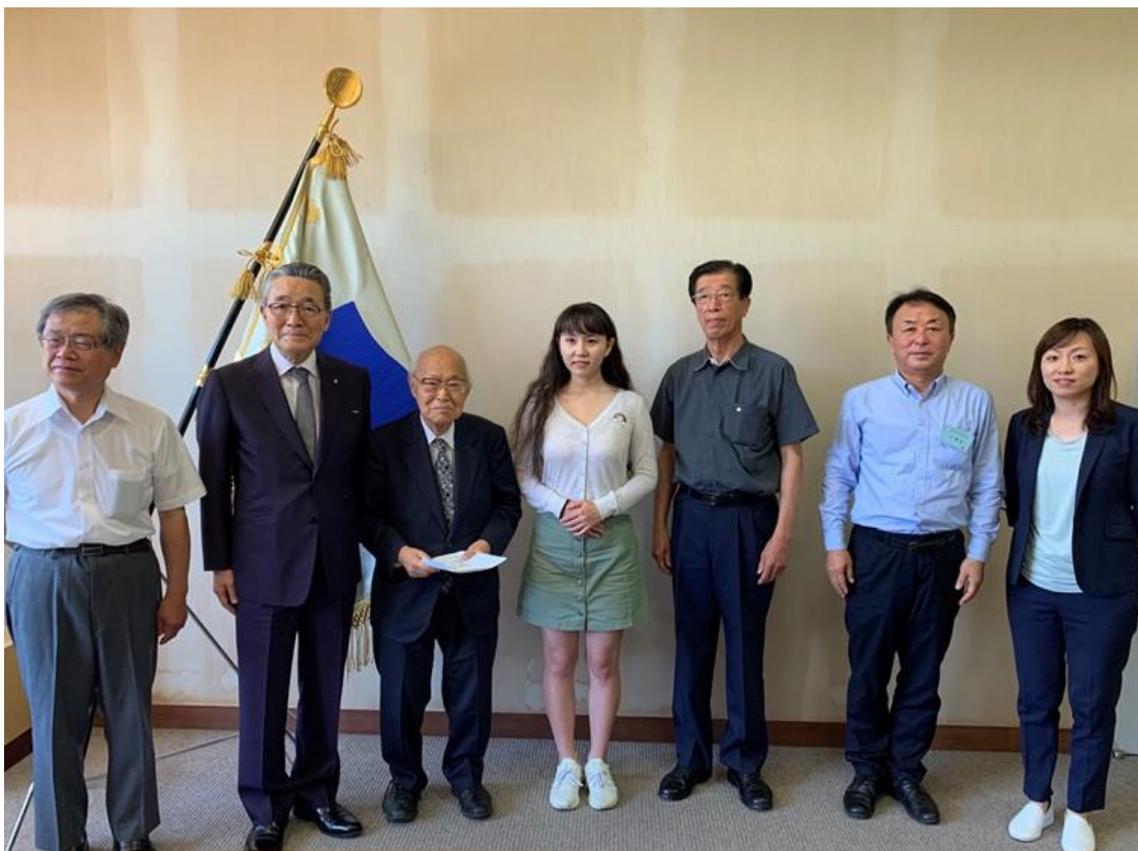
「物流が止まるかもしれない！」ととりあえず集まったお金で、医療用防護服など物資を買い集めて、静岡県が友好提携を結んでいる浙江省に送りました。

その後も、静岡文化芸術大学に通う研究生や准教授などが、在日企業家などにも声掛けをして、200 万円を超える募金が集まりました。

そのころになると今度は、日本のコロナ感染が深刻になってきて「マスク騒動」が起きるほど日本国内も切迫してきました。

その時でした。中国人の方々から、「日本人に(武漢発の感染)迷惑をかけてしまった。残った募金は、日本の皆さんへの義援金にしてほしい」と提案がありました。この温かな気持ちに協会のメンバーは残った 120 万円の使い道を検討しました。

その結果出た結論はこうでした。



静岡文化芸術大学と静岡県立大学の 46 名中国人留学生に義援金を贈呈(左から 3 人目が故静岡文化芸術大学有馬朗人理事長)

日本国内の感染拡大は急激で、政府が緊急事態宣言を発し一斉休校が始まったため、小学生から大学生まで、登校できなくなり、大学などではリモート授業に切り替わっていました。

中国からの留学生も勿論同じですから、大学に通えない、灯の消えた街のお店が営業できなくなりアルバイトもなくなり、他国の地での生活に大きな不安が高まっていることがわかりました。そこで、把握できる範囲で、静岡文化芸術大学と静岡県立大学の中国人留学生 46 名に義援金を贈ることにし、静岡県日中友好協会の代表(渥美事務局長)が二つの大学に学業支援金として届けました。

一人 2 万 5 千円と少額でしたが、中国との交流に永年ご尽力してきた静岡文化芸術大学の有馬朗人理事長は「自分は 90 歳を過ぎたが、日中間の政治混迷を乗り越えて科学技術などを通じた交流をもっとやらなければならない。留学生たちの困窮した状況が良くなり、日中交流がより深まることを望みたい。うれしい！」と感謝の言葉を述べられました。有馬理事長は、昨年 12 月に急逝しましたが、日中科学技術交流に燃やした情熱は、残された私たちや次の世代に必ずや引き継がれていくと確信しています。

静岡大学の湖南省出身の先生は、「中国が日本から受けた恩返しをしたい！」と、日本を気遣う中国の方々からの寄付を募り、静岡市立病院や牧之原市にある榛原総合病院に医療資材を寄付してくださいました。



中国からの支援物資を榛原総合病院へ医療物資の寄付

その後も中国側から、数え上がたらきりがないほど、マスクや防護服を無償であるいは廉価で提供していただきました。

心から感謝しています。

梅の花が満開になり、早咲きの桜がちらほらしてきました。

中国はコロナを克服したということですが、日本はまだです。ワクチン接種が始まりますが、コロナに対してまだまだ気を緩めることはできません。

両国のみならず、世界中からコロナを追い払って、再び笑い合いながら「あの時はあり

がとうございました！」と再開できる日が早く来るよう願っています。

日文:西原茂树, MIJBC 理事長

中文:JST 客观日本编辑部